

日経トレンディ「今年のヒット予測ランキング」の20位にランクインした「温泉津温泉」。今夏、世界遺産登録が確定すれば日本初の世界遺産の中にある温泉街となります。メディアでも取り上げられる機会が増え、全国から注目が集まっています。温泉津の魅力に引きつけられた若者が今、温泉津を舞台に夢に向かってまい進中です。

炎に挑む若人たち

若陶会 (わかとうかい)

若陶会は、昨年11月、椿窯の荒尾浩之さん(30)と(尙)椿窯の荒尾則和さん(38)、荒尾常寛さん(36)の3人により結成されました。3人は、地元で採れる「ゆのつ陶土」や福光石の釉薬などを使った、新しい「ゆのつ焼」を模索中です。12月中旬、京都から駆けつけた陶芸仲間2人とともに湯泉津やきものの里にある「登り窯」に自分たちの手で初めての火入れを行いました。食器など



温泉津の土と釉薬で新たな「ゆのつ焼」を



登り窯の前に並ぶ作品

500点余りの作品を入れた「登り窯」に午前7時に火を入れました。約500束の薪をくべながら、16時間に及ぶ炎との格闘は降り出した冷たい雨の中、夜遅くまで続きました。火入れから6日後に窯出し。個性溢れる作品が窯の前に並びました。代表の浩之さんは、「登り窯で思いがけない作品ができた。成果はあった、今後の課題も見つかった」と、次回に向けて意欲を燃やしています。

幸せといわれる作品づくり

あらお つねひろ
荒尾 常寛



平成11年7月、28歳のときに温泉津町へUターン

大学卒業後、大阪市の衛生器具メーカーに勤めていた常寛さんは、幼い頃からそばにあった焼物が頭から離れることがなかったと言います。いずれは帰って父、寛さん(64)を師として陶工の道に入りたいと思っていました。

現在、常寛さんは、既にこの道に入って20年になる兄の則和さんと一緒に家業である(尙)椿窯を支えています。

「父や兄がやっているようにしても、土が言うことを聞いてくれない。まだまだ発展途上」と笑う常寛さん。「使ってもらって幸せといわれるような作品づくりがしたい、そのためには心の入れようが大切」と、日々土と向き合い陶芸一筋の日が続きます。

やきもので「おもろいまち」づくり

あらお ひろゆき
荒尾 浩之



平成4年4月、陶工を目指し、京都府立陶工高等技術専門学校に進学。卒業後、同じく京都の市立工業試験場へ。計4年の研鑽の後、平成8年4月、温泉津にUターン

浩之さんは、京都での修行の道を選んだ矢先、父、浩一さん(69)の入院で帰郷を決意。浩一さんは「兵糧攻め(仕送りをストップ)にしたらすぐ帰ってきよったわ」と、当時を振り返り目を細めます。

今は家業を手伝う傍ら、志を同じにする仲間との活動が楽しいと言う浩之さん。今後の「若陶会」について、「自分のスキルアップという目的もあるけど、登り窯の活用を含めて、今までとは違ったゆのつ焼のPRをしていきたい。お年寄りを対象にした陶芸教室や、ふるさとに貢献できる活動もやっていきたい。あとは、おもろいまちになったらいいな、ただそれだけ」。

今、温泉津が熱い！



多夢想屋 (たむそうや)



たむら そうや
田村 宗也

夢に向かって神楽面づくり

平成17年11月、新潟県燕市から江津市へ1ターン。安東三郎氏（神楽面師・江津市）に弟子入りして1年が過ぎ、このたび創作の拠点を温泉津へ

田村さん(33)は、コンピュータグラフィックの専門学校でアニメーションや造形を学び、NHKホールでの舞台担当として芸能分野の様々な経験を重ねてきました。

しかし、徐々に自分の仕事に不安を抱き、チームワークでやる仕事よりも一人でやれる仕事をしたいと、バイク便を生業とするようになりました。そして、趣味の美術館巡りで人生の転期が訪れます。

ある美術館で室町時代の能面に出会い、500年という世代を経て現在に残るその姿に感動し、後世に証を残すことができるとの伝統工芸に憧れるようになりました。

また、以前から田舎暮らしに興味があり、Uターン雑誌で山陰には出身地の新潟と似た海

と「石見神楽」があることを知り、石見神楽の歴史を知れば知るほど大衆文化が受け継がれている島根の素晴らしさにひかれていったのです。その後、一念

発起で島根にやって来て、県定住財団の支援が終了した昨年の11月、今後の活動拠点を求めました。もともと海や温泉が好きなことや観光地的な場所、若い人たちが熱い場所はここしかない、温泉津を選びました。将来の夢は、「面づくりはもちろん、観光客が楽しめる場所を作ること。趣味の古い映画を流すとか射的場みたいな場所を作って、その横で神楽面を作るなんてお洒落でしょう」と語る田村さん。「多夢想屋」と名付けた工房には神楽面と対称的な笑顔が待っています。

した。広島市で7年間経営していたサーフショップが立ち退きになったのです。これをきっかけに計画を実行に移すことに。一方、藤川さん(29)は広島県東広島市の出身で田舎育ち。大内さんの移住計画に何も言わず付いて来てくれたそうです。かつての店名を引き継いだサーフショップ「サブライズ」は、昨年7月28日、JR石見福光駅前通りにオープンしました。主にボードの修理のほか、サーフィン関連商品を販売しています。お客の大半は広島の間ですが、最近では地元客も訪れるようになり、順調に営業しているそうです。

サーフショップ サブライズ



ふじかわ な 津 紀 & おおうち あきひろ
藤川 奈津紀 & 大内 昭宏

海の見えるところに住みたい

昨年5月、広島市から温泉津町福光へ1ターン

「島根タイム」。広島の間田村さんが「時間がゆっくり流れている」という意味で使う言葉です。ここを訪れた仲間のほとんどが、普段より時間の流れが遅いような錯覚に陥るとか。「自然と早寝、早起きができるんです」と話す2人は福光へ来て、ますます健康になったそうです。「福光は、思っていたより住みやすく、何の不便も感じませんよ。ずっと、ここで暮らしたい」と和やかに語る2人は今年3月に結婚の予定です。

大内さん(34)は、13年前から福光海岸へ通いはじめ、この福光が大好きになり、40歳までに転機は思わぬ形でやってきま